

青  
あおおに  
白  
鬼  
ク  
調査  
4

かいぶつ しら こうりやく  
怪物たちの島を攻略せよ！

ノプロプス くらたけんじ  
noprops・黒田研二／原作

なみつみ  
波摘／著

つらぎ  
鈴羅木かりん／イラスト

### 優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っている。レイカに不穏なメツセージを送ったあと、姿を消す。

### レイカ

北部小学校の五年生。

学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

### スズナ

北部小学校の四年生。

夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルトクラブに入ることを決意。レイカになついている。

## ひろし

レイカのクラスメイト。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。

## 魔尾町現悩(ゲンノウ)

オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いている。

## タケル

ピンヨン・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレルと面倒なので秘密にしている。

## たまちゃん

ひとたまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。

# 4

## 青 あおおに 鬼 ク 調査 レポート

青島 (ドクロ島) MAP	006
1 幼なじみを救うため	007
2 昨夜の出来事	016
3 ドクロ島への上陸	032
4 海の中から	040
5 再会を邪魔するのは	054
6 キングはんぺん	070
7 島の過去	084
8 青鬼の祭壇	092
9 大混乱の逃走	114
10 ブルーベリー色の包囲網	123
11 逆転の作戦	138
12 南栈橋の戦い	153
13 優助の強大な力	162
14 青色の弾丸	172
15 驚きの新学期	181
青鬼調査レポート	186
青島 (ドクロ島) MAP その2	188

オカルト調査クラブのレイカとスズナは行方不明になった優助を探すため、旧碧奥港の調査をしていた。

そこで遭遇したのは、不思議な力をもつ青いひとだまの「たまちゃん」と、碧奥地区

のオカルト現象を調査するためにやってきていた民族学者の魔尾町現樹（ゲンノウ）。

……そして、あのブルーベリー色の怪物「青鬼」たち。

旧碧奥港での死闘の末、海に転落した優助。

大切な幼なじみを失い、絶望していたレイカのもとに、一通のメッセージが届く。

「俺、まだ生きているみたいだ」

それは、青島に漂着した優助からのメッセージだった。

レイカとスズナ、そしてゲンノウの三人は優助を救出するべく青島——通称、ドクロ

島へ向かう。

あおしま  
青島 (ドクロ島) MAP

うみ  
海

どうくつさいだん  
洞窟祭壇

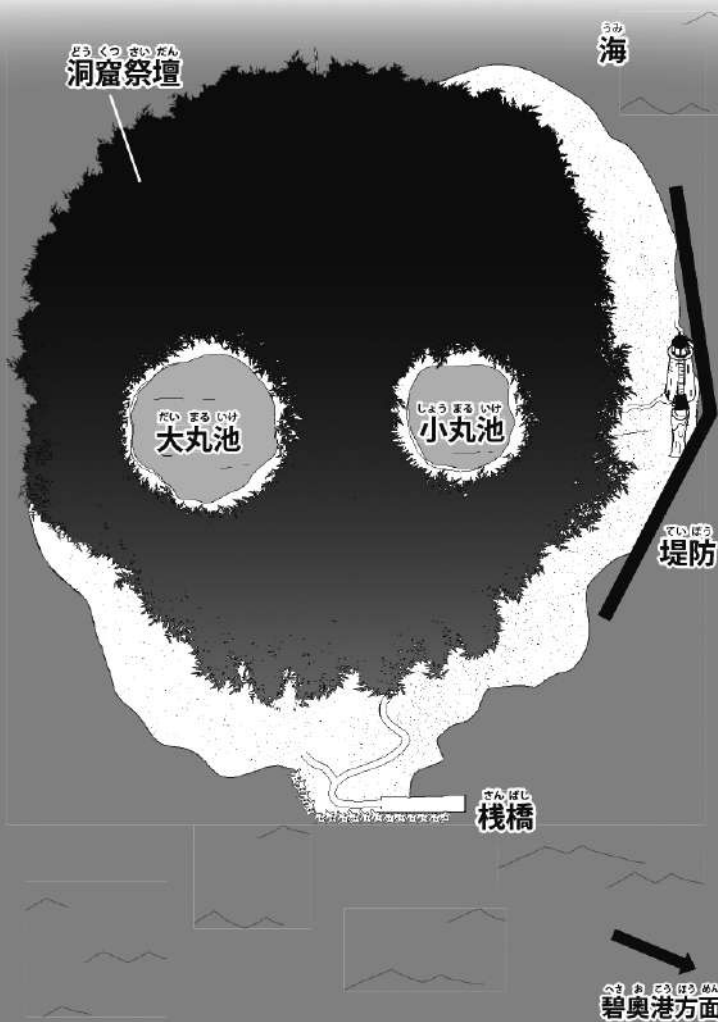
だいまるいけ  
大丸池

しょうまるいけ  
小丸池

ていぼう  
堤防

さんばし  
棧橋

へき あり とう ほう めん  
碧奥港方面



# 1 幼なじみを救うため

波の音がとても大きく聞こえる。

身体が上下に何度も揺れた。地上では体験できない、独特な揺れだ。

この感覚を味わうのは二週間ぶりだった。

二週間前、わたしの通う北部小学校の五年生は、船で一泊二日の課外授業に出かけた。あの時に乗っていたのは大きな船、そして今乗っているのは——小さな漁船だった。

わたしとスズナちゃん、たまちゃん、そしてゲンノウさんに乗せた漁船は、海をかきわけてぐんぐんとまっすぐ進んでいく。

午前十時。旧碧奥港での、あの戦いの翌日。

太陽はまだ頭上までのぼっていないが、そのまばゆい光はわたしたちの行き先を照らしていた。

「……青島」

わたしはだんだんと大きくなってきた島の影を見ながら、ぼつりとつぶやく。

「優助君は無事でしようか……?」

スズナちゃんも麦わら帽子を強い海風にさらわれないよう、片手で押さえていた。

「今はあのメッセージを信じるしかないわ。これでも、昨日よりはるかに良い状況よ。希望を持てるようになっただけでずっとマシだわ」

わたしは右手で強く握った自分のスマホに目をやる。

今日の朝、優助からメッセージが届いた。

「俺、まだ生きているみたいだ」

その文章から始まった一連のメッセージには、優助が青い虫を吐き出して人間の姿に戻ることができたということ、そして青島らしき場所に漂着したことが書かれていた。

「まだ何かの罫つていう可能性がないわけじゃない。でも、わたしは信じたいの。優助は海を流されている間に本当にあの虫を吐き出して元の姿に戻れたんだ、つて」

「ええ。私も信じています。……ふふ、レイカちゃん、ようやくいつものレイカちゃんに戻りましたね!」





「へ？」

「やっぱり、レイカちゃんに昨日の夜みたいな暗い表情は似合いません。今みたいな、希望を持ったカッコいいレイカちゃんのほうが私は好きです」

「そんなに昨日と違うかしら？」

「えへへ。優助君が生きているとわかった瞬間から、全然変わりましたよ。——絶対に、優助君を助けましょう」

スズナちゃんは可愛い笑顔を浮かべながらも、その瞳はとても真剣だ。

わたしは大きくうなづく。

それとほぼ同時に、空中に浮かぶ青色の炎のようなものが目の前にふいとやってきた。

「たまちゃん、あまり離れちゃダメよ。海の

上ではぐれてしまつたら、再会できるかわからないんだからね」

そう注意すると「了解」という意味なのか、両目を二回パチパチとさせて、青色の炎のひとつだま、「たまちゃん」はわたしの右肩にふわりと乗つた。

相変わず、熱さも重さも無い。

右肩に遠慮なく乗つてくるということは、たまちゃんはわたしの体力がしつかり回復したと判断したのでらう。昨日の夜は気をつかつてくれたのか、たまちゃんが肩に乗つてくることは一度もなかった。

右肩に乗つたたまちゃんは、炎の勢いを少し強めた。わたしから少量のエネルギーを吸い取つて、自分の力に変えているのだ。

たまちゃんとは昨日、旧碧奥港で出会つたばかりだが、今もわたしのそばを離れる気配はない。青鬼と違って、行動範囲——いわゆるテリトリーのようなものはないのだろうか。

それとも「わたし」のことをテリトリーの中心と決めたのか。

理由はわからないけれど、たまちゃんがついてきてくれるのは正直頼もしかった。

わたしやスズナちゃんだけでは解決できない問題も、たまちゃんがいればどうにかなることが多いからだ。

そして。昨日出会ったばかりといえ、もう一人。

「ふふ。それにしても、レイカ君の友達がああ青鬼になっていたなんて！ 右肩のひとだまとい、本当にキミはオカルトに愛された少女だ……！」

わたしたちの会話に加わってきたのは、民俗学者のゲンノウさんだった。

ペンネームは魔尾町現悩。オカルトについても詳しいのだが、その人格はまともとはいえない三十代後半くらいの男性だ。

彼の伸ばしつ放しの長い髪が海風に吹かれて、背中の辺りでおどろおどろしく、波打っている。見た目も少々不気味だ。

出会った当初、オカルトの世界で有名人であるゲンノウさんはわたしにとつて尊敬の対象だった。けれど、彼のオカルトへの愛は極端で、ひどくねじ曲がっている。旧碧奥港の事件を通してそのことを知った。

ゲンノウさんはわたしと似ていて、でも、決定的に何かが違う人間だった。

オカルトと対面した時、いつも暴走してしまおうわたし



を止めてくれる優助や、スズナちゃんのような存在がいまま、成長してしまつた大人という印象だ。

近づいてきたゲンノウさんに対し、スズナちゃんは冷たい視線を向けてわたしをかばうように立つた。

たまちちゃんはゲンノウさんの好奇心にあふれた狂気の視線から逃げるように、わたしの背中に隠れてしまう。

「あなたみたいだな、本当ならレイカちゃんと一緒に船になんて乗せたくなかつたんですけどね！」

「おや。スズナ君は昨日の夜から冷たいな。まあ、私としてはそれでもまったく構わないのだが」「用がないなら、向こう行つてください。たまちちゃんも怖がつてますし。しっし！」

「ス、スズナちゃん。ちょっと言いすぎじゃないかしら……」  
普段、おどおどしていることが多いスズナちゃんだけでも、ゲンノウさんへの態度だけは非常に冷たかつた。

なんだかんだ、これもスズナちゃんの新しい一面の発見……などと考えたら、怒られてしまひそうだけれど。スズナちゃんはわたしやたまちちゃんを守るため、ゲンノウさんのことを人一倍警

戒かいしているのだ。感謝かんしゃしなくてはならない。

でも、わたしはゲンノウさんのことを、実はそこまで危険視きけんししていなかった。

なぜなら――。

「スズナ君くん、そこまで警戒けいかいしなくても大丈夫だいじょうぶさ。なにせ、私わたしとレイカ君くんの間まには『取引とりひき』があるのだから」

そう。今日の朝あさ。優助ゆうすけからの連絡れんらくをもらつた直後ちかくご。

わたしはゲンノウさんと、ある『取引とりひき』をした。

その中なかには、わたしや友達ともだちに絶対手出しぜったいてだをしない、という内容ないようも含めてあつた。そしてゲンノウさんはきちんと約束やくそくを守ると言いつた。

もちろんそれと引き換えひきかへに、わたしもある重要な約束じゆうやうやくそくをゲンノウさんとしたのだが。

この『取引とりひき』がある以上いじょう、ゲンノウさんはわたしたちにむやみに手てを出すことではないだろう。

「――おい、みんな！ そろそろ青島あおしまに到着とう着するよ！」

漁船ぎょせんの操縦そうじゆうをしてくれたいた大人の男おとなのおとこの人の声こゑが届とどく。

その人の名前なまえはサメさん。本名ほんなまは鮫島海斗さめじまかいとというらしい。

普段ふだんは碧奥水族館へきおくすいぞくかんでスタッフとして働はたらいていると聞きいたが、今日きょうはちょうどお休やすみだというこ

とで、船を出してくれることになった。

実はサメさんには昨日の夜から今日にかけて、とてもお世話になっているのだが、その話は今はしなくていいだろう。

「さあ、レイカ君の友達を探しにいきましょう。他にも何か『面白いもの』に出会えるといいのだがね」

ゲンノウさんはそうやって楽しそうに言った。

サメさんは青鬼やたまちゃんのこととは知らない。漁船で青島へ向かってくれているのも、ゲンノウさんの研究のためということになっていた。

たまちゃんもサメさんにだけは見つからないよう、朝からずっと素早い動きでサメさんの背後を取り続けている。小さな忍者みだいだ。

船から少し身を乗り出して進行方向を見ると、そこにはだいぶ大きくなってきた青島が見えた。島の形は少し歪んだ円形でその直径はおよそ一キロ。

何も障害物がなければ、簡単に横断できる広さだが、島の大部分には草木が生えているため、実際に横断するのは大変だろう。

島としては規模が小さいとはいえ、近くまで接近すると、じゅうぶん巨大に見えた。

「あそこに優助がいるのね」

わたしは青島をじつと眺め、そして改めて目的を、心の中で確認する。

青島に漂着した優助を見つけ、無事に連れ帰る。それだけのことだ。

大丈夫。

旧碧奥港と違つて、青島に化け物はいないはず。落ち着いて探せばいいだけだ。

なぜだか胸がザワザワしているのは、青島がその形からドロク島という不気味な名前前で呼ばれ

ているからだろう。

だけど、前に課外授業で来た時は何もオカルト的なことは起こらなかつた平和な場所だ。

「船着き場は……たしか島の南側にあつたはずだ」

サメさんはそう言つて、漁船をゆつくりと青島の南側に向けて旋回させた。

やつと優助のいる島に辿り着く。

わたしはこれから下り立つ青島をじつと観察しながら、昨日の夜から今に至るまでのことを、

ぼんやりと思ひ返していた。